少年讀本第十三編

伊能忠敬

幸田露伴著
富岡永洗画

はしがき

數年前予は伊能忠敬翁の一生を記したる事ありしに今また翁の傳を少年のために物せよと乞はるゝに會し、同一筆法を以て同一事實を繰り返して記さんは甚だ易き事なれど、また甚だ好ましからぬ事なれば、前回の記と今回の記とをして相冒さゞらしめんが爲に、前回の記に比しては甚だ異なる文章体裁を今回の記には具せしめたり。これ此の記の普通の傳記体とは、やゝ其揆を同じくせずして、一種の体をなせる所以なり。

伊能翁の如く華麗ならずして摯實なる一生の經歴を具せる人は、最も國家民人に對して益を與ふるにも關せず、世間は之を尊重稱讃すること餘り深からざるが如し。されど世間は其實多く

伊能翁の如き人を有せざるべからず。これ予の敢て再び伊能翁を傳ふる所以なり。人の一生は其人の一生の華麗なるが故を以て尊かるべきにはあらず。やゝもすれば華麗なる經歷を有せる人を以て偉大なる功績を遺せる人なりとするが如き傾きを有するは少年思想の稚弱なる人に免れ難き習ひなりとす。これ予が特に本傳の冒頭に於て、幡隨意長兵衛を點出して伊能翁に陪せしめたる所以なり。

己未夏　露伴識

少年讀本
第拾三編

伊能忠敬

幸田露伴著
富岡永洗畫

其一

梅は既に散り櫻は未だ笑はねど、春も半の風暖かに天長閑にして、柳の芽の舒び、蘆の角ぐむなど、陸にも水にも觀るべき趣きいと多き頃の事なり。ひとり杖を曳きて、そこと指す方も無く徘徊したるに、圖らずも俗に廣德寺前といふところに行きかゝりぬ。こゝの通りを北に折れて、古は新寺町といひ、今は北清島町とい

ふところに至れば、そこに源空寺といふ大寺ありて、其の境内に幡隨意長兵衛の墓ありと聞きしが、耳にのみ聞きて、未だ眼のあたり見たること無し。幸ひ今日は身に事無くして心に閑あり、かつは又其處近くも來つるものなり、一代の大俠のあと如何なるさまをやなせる、行きて見て一捻の香、一枝の花をも供へんと、尋ね〳〵て源空寺に到る。寺は文珠菩薩を安置せるを以て人にも知られたるところなれば、いと容易く行きつくことを得たり。いかめしき門を入り、棟高き本堂の左より其背後のかたに廻りて、或は矮き、或は高き、或は大なる、或は小なる墓碣石塔の幾個となく列び立てる間を過ぎながら、豫て地藏尊の刻まれたるが其碑なりと聞きたるを心あてに、それかこれかと搜しけるが、これも

また我と同じやうに心ざせる墓を索めかねてや、彼處に行き、此處に行きて、並み立てる石碑卒塔婆なんどの蔭に見え隠れする三人づれの人あり。一人は四十に近かるべく、二人は十五六にもあるべきか、共に皆洋服を着たり。我が關るべきことならねば、我は我が捜さんとをもふものを只管捜しけるが、やがて、それかと覺しきものを得たれば、眼を留めてこれを觀るに、果していと大きなる石に錫杖を持ちて立たせたまへる地藏菩薩の御姿を彫り浮めたるが、二つ並びて立てられたり。其一つに幡隨意長兵衛墓と彫りたる文字明らかに讀み取られたり。此の墓の眞僞は我が知るところにあらねど、打見たるところ流石に古びて碑のおもてに見えたる慶安三庚丑の文字の示せる如く、まこと其頃に